



野菜篇



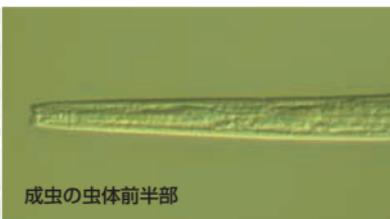
イチゴメセンチュウ

ハリセンチュウ目 アングイナ科

Nototylenchus acris Thorne Strawberry bud nematode



いちご寄生株



成虫の虫体前半部



芽から検出された集団

【加害作物】

いちご

いちごの生長点周辺に寄生し、新芽や花を加害する。展開葉や花は奇形となり、ランナーの葉柄はわん曲し幼葉は萎縮する。多発生の場合、株全体が萎縮し葉柄や芽が赤くなる。これは「いちごの赤芽」とよばれる。奇形果を生じ結実数も減少、やがて枯死に至る。いずれの作型も育苗期が増殖のピークであり、被害は夏期に顕著となる。本種は被害株のランナーの他、雨水や灌水により周囲に伝播する。対策は、定植前に健全株をしっかりと選ぶことである。また、被害株は見つけ次第、ランナーも含めて焼却処分にする。このほか、仮植床や定植後生育初期の薬剤散布も有効である。

ネグサレセンチュウ類

ハリセンチュウ目 プラティレンクス科
Pratylenchus spp. Root-lesion nematode



【加害作物】

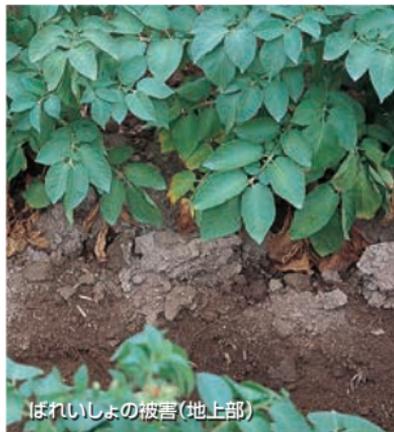
マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物
問題となるのは主に根菜類、いちご、レタス等

主要なものにクルミネグサレセンチュウ、キタネグサレセンチュウ、およびミナミネグサレセンチュウがある。なかでもキタネグサレセンチュウが最重要種である。根部の組織内に幼虫が随時侵入し、移動しながら吸汁加害する。また、破壊された組織からフザリウムなどの菌類が侵入、増殖し複合的に被害を及ぼす。このため、センチュウ主因の「根腐れ」が、土壌病害と誤診されやすい。病害の防除をしても、一向に改善が見られないときは、センチュウ害も疑ってみるべきである。被害は、根の破壊に伴う地上部の生育阻害もあるが、根菜類では、少発生でも黒点症状など商品品質の低下を招く。防除対策の基本は、定植前の土壌消毒および定植時の粒剤処理である。定植後の灌注処理も有効である。しかしいずれも作期が長い場合は、栽培後期に被害が発生しやすい。

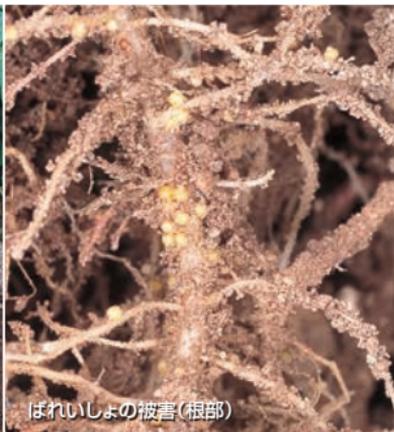
ジャガイモシストセンチュウ

ハリセンチュウ目 ヘテロデラ科

Globodera rostochiensis (Wollenweber) Yellow potato cyst nematode



ばれいしょの被害(地上部)



ばれいしょの被害(根部)

【加害作物】

ナス科 問題となるのは、ばれいしょ

主に北海道に生息する。根部に寄生し、水分や養分の吸収を阻害する。このため、7月上旬の開花期頃から地上部の萎れや生育抑制がみられ、次第に葉が黄化、8月になると下葉から中葉が枯れ落ち、萎れた上葉のみが残る。これを「毛ばたき症状」とよぶ。早期に枯死するため、減収する。シストセンチュウ類は、後述のネコブセンチュウと近縁のグループであるものの、より高度に進化している。すなわち、雌成虫の体表(角皮)は次第に黒く硬くなり、数百の卵が入ったシスト(包のう)を形成する。シストは著しく耐久生存性に富み、10数年間生存する。このため根絶防除は極めて困難である。防除は、輪作、抵抗性品種の栽培、および農薬使用の組み合わせが有効である。

ネコブセンチュウ類

ハリセンチュウ目 メロイドギネ科

Meloidogyne spp. Root-knot nematode



幼虫



左:メロンの被害 右:防除区



すいかの被害



にんじんの被害

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物
野菜では、ウリ科、にんじん、トマト、なすで被害が大きい

主要なものはサツマイモネコブセンチュウ、アレナリアネコブセンチュウ、キタネコブセンチュウ、およびジャワネコブセンチュウの4種である。第2期幼虫が土壌中を動き回り根に侵入し、雌が定着・肥大化し「根こぶ」を形成、水分や養分の吸収を阻害する。被害程度は作物によって異なる。ウリ科は被害が大きく、夜はしゃんとするが、昼間はしおれてぐったりしてしまう。一方、ナス科は少発生だとほとんど実害がない。しかしナス科作物は栽培期間が比較的に長いので、防除を怠ると、収穫後期に大きな影響が出る。防除対策の基本は、定植前の土壌消毒や定植時の粒剤処理である。抵抗性品種の育成などもすすんでいるが、絶対的なものではない。

ナメクジ類

ナメクジ 有肺目 ナメクジ科
Meghimatium bilineatum (Benson)

チャコウラナメクジ 有肺目 コウラナメクジ科
Limax valentiana (Férussac) Threeband gardenslug



チャコウラナメクジ



はくさいの被害

【加害作物】

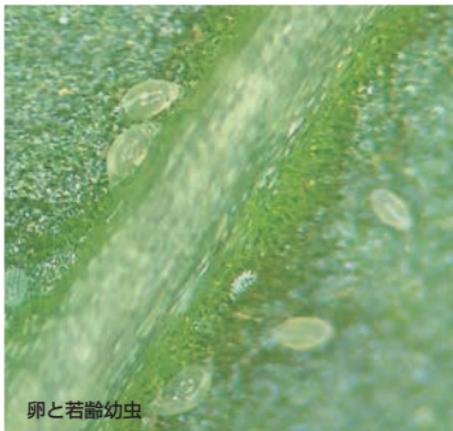
マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物

ナメクジは在来種、チャコウラナメクジは外来種である。ともに葉、茎、花、および果実と、作物全ての部位を食害する。食害痕はヨトウムシ類に似ているが、本種は白く光る這い痕が残るので、区別ができる。ナメクジは殻を持たないため乾燥に弱い。このため昼間は落ち葉やマルチ等資材の下に隠れ、夜間に活動する。したがって、圃場を乾きやすい環境にすること、潜伏場所になるごみや資材をこまめに片付けることが防除につながる。この他、銅線や銅板を圃場まわりに設置することも有効といわれる。薬剤防除では、夜間這い回る際に薬剤暴露されるよう、作物にはムラなく散布する。

チャノホコリダニ

ダニ目 ホコリダニ科

Polyphagotarsonemus latus (Banks) Broad mite



卵と若齢幼虫



なすの被害

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物
特に果菜類

生長点を好む。加害されると成長が止まり、被害部は茶色にくすんだようになり、着蕾数、着果数の減少、果実肥大抑制等をおこす。ダニの仲間でも、ハダニ類はまだ肉眼で存在の確認ができるが、ホコリダニの仲間は小さくて、ほとんど肉眼で確認することはできない。葉かきなどの作業で手やハサミに付着していることもある。そのため知らず知らずのうちに被害が広がっていく。目視が困難だから、薬剤処理後に虫の生死の確認が簡単にできない。したがって、被害が圃場の一部にしか目立たないときに、スポット防除をする場合でも、特に敵方向に広めにむらがないように薬剤散布をすることが、防除上のポイントである。

ハダニ類

カンザワハダニ ダニ目 ハダニ科

Tetranychus kanzawai Kishida Kanzawa spider mite

ナミハダニ ダニ目 ハダニ科

Tetranychus urticae Koch Two-spotted spider mite

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物

野菜類で発生するハダニ類はこの2種が主である。ともに成虫でも0.5mmほどで、ほとんど葉の裏で生活する。ナミハダニには赤い系統(赤ダニ)と黄緑色の系統(青ダニ)があり、赤い系統は肉眼ではカンザワハダニと全く区別がつかない。体が小さいので発生初期はみつけるのが難しい。気がついたときには、既に多発生になっていることがあり、ひどいときは落葉してしまうので注意する。右上のなすの写真のように、葉の緑色が小さな点状に白く抜ける初期症状を見逃さないようにして、葉液のかけむらなく防除を行うことがポイントである。かけむらがあると、そこからまた急速に増殖し、かえって大きな被害となる場合がある。右下のいちごの写真のように、糸を張って虫が這い回るのがわかるようになると、糸を吐いて風に乗って拡散して被害が広範に広がってしまう。また、農薬に対する抵抗性をつけやすく、以前はよく効いた農薬が効かなくなっている。効果の高いものを続けて使わず、作用性(効き方)の異なるものを輪番で使うことが必要である。



カンザワハダニの雌成虫と卵



なすの被害



ナミハダニの成虫



いちごの被害

トマトサビダニ

ダニ目 フシダニ科

Aculops lycopersici (Masse) Tomato russet mite



【加害作物】

ナス科 特に問題となるのはトマト

ホコリダニと同様非常に小さく、肉眼で確認するのは困難である。果樹や茶などではいろいろな種類のサビダニ類がいる。一方野菜類では、トマトサビダニの発生が近年増加している。本種は1986年初めて侵入が確認された。ホコリダニとは異なり、特に生長点を好むのではなく、むしろ下葉から葉や茎・果実を加害する。葉・茎の被害部位は次第に黄化し、まるで病気に冒されたような症状を呈する。果実は表面が鮫肌状になり褐変する。病害と間違えて防除すると、手遅れになることがあるので注意する。

ロビンネダニ

ダニ目 コナダニ科

Rhizoglyphus robini Claparede Robin bulb mite



【加害作物】

ユリ科が主で、らっきょうが一番問題となる
ねぎ等でも被害が出る

体長0.7mmと小さい。しかし、腹部は白く丸い豆粒状で、エンジ色の頭部と脚を持つため、肉眼でも存在がみとめられる。らっきょう等の種球部と根際の表面に寄生し食害する。増殖すると種球は黄褐色となり、根もなくなり生育が阻害される。対策として、らっきょうは種球を植え付けるので、親の種球の寄生を絶つために、十分消毒をすること。また、植え付ける圃場に生息していないように、前作からの寄生した残渣を片付けるなど、耕種的な対策も重要である。農業に対する抵抗性を獲得している場合があるので、あらかじめ効果がある薬剤を確認しておくことが必要である。

ミカンキイロアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科

Frankliniella occidentalis (Pergande) Western flower thrips



成虫



なすの被害

【加害作物】

加害作物は広範だが特に問題となるのはナス科、ウリ科

1990年に初めて確認された、海外からの侵入害虫である。雄・雌とも橙黄色の1.5mmほどの紡錘形をした微小害虫で、後述のミナミキイロアザミウマなど他のアザミウマ類と、肉眼での区別は難しい。丈夫なくちばし状の口を、植物組織にたたきつけて壊し、汁を吸う。このため葉が白斑から褐色のかすり状に傷ついたり、果実が曲がったり白斑を生じたりする。ウイルスの媒介も行う。侵入当初から、多くの農業に対する抵抗性を身につけており、ミナミキイロアザミウマとは、有効な薬剤が異なる場合があるので、注意する。また蛹の時期は、植物体から離脱し土中で過ごす。このため多発した場合は、一度の薬剤散布で作物地上部を防除しても、まもなく新成虫が発生してくる。

ミナミキイロアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科
Thrips palmi Karny Melon thrips



【加害作物】

加害作物は広範だが特に問題となるのはナス科、ウリ科
 ただしトマトには全く寄生しない

1978年に発見された侵入害虫である。加害の仕方は前述のミカンキイロアザミウマと同様であるが、被害症状が若干異なるため、区別できる場合がある(下表)。侵入当初から農薬に対する抵抗性があり、侵入後も次々と新たな薬剤に抵抗性を獲得している。そして地域ごとに、抵抗性を示す薬剤の種類が異なっているため、注意が必要である。同じ農薬を繰り返し使わないことが大切である。

■ミナミキイロアザミウマとミカンキイロアザミウマの被害の比較

	葉表	なす、ピーマンの被害	きゅうり果実の被害
ミナミキイロアザミウマ	葉脈に沿って加害	果実に筋状の激しい奇形を生じる	極高密度にならないと被害が出ない
ミカンキイロアザミウマ	葉脈間を主に加害	白斑症状等が主体。あまり奇形を伴わない	低密度から奇形被害を発生

ヒラズハナアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科

Frankliniella intonsa (Trybom) Flower thrips



雌成虫



幼虫



トマトの被害

【加害作物】

花粉を好み広範な作物に寄生する

しかし、被害を及ぼすのはトマト、いちご、ピーマンなど一部のみ

日本在来の害虫であり、野外の雑草にも普通に生息する。雌成虫は褐色でやや大型なので、ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマと区別できる。しかし、雄成虫は橙黄色で区別は困難である。花粉と蜜で生活しているので、葉などに被害は出さない。しかし、花内の子房に産卵することにより、果実が生育したのち産卵の痕が白斑等となり、商品価値が失われる。またウイルスの媒介も行う。あまり顕著ではないものの、一部では農業に対する抵抗性も獲得しており、注意が必要である。

ネギアザミウマ

アザミウマ目 アザミウマ科

Thrips tabaci Lindeman Onion thrips



【加害作物】

ネギ属を好むが広範な作物を加害する

日本在来の害虫で、従来から多くの作物に寄生していたものの、大した被害は起こさず、その名の通りねぎ・たまねぎの害虫であった。しかし近年、みかんや各種野菜でも多発生と被害が報告されている。また、一部農薬に対しては抵抗性を身につけている。このため、登録農薬であっても、使用にあたっては、圃場の一部で試し散布をして効果の確認をした方が無難である。外観は橙黄色の1.5mmほどの微小害虫で(冬場は色が濃くなるが)、他のアザミウマと肉眼で区別するのは難しい。

カメムシ類

カメムシ類は種類が多く、形・大きさ・寄生植物も様々である。

ナガメ カメムシ目 カメムシ科

Eurydema rugosum Motschulsky Stink bug

【加害作物】 アブラナ科

成虫・幼虫ともアブラナ科作物上で過ごし、吸汁した箇所は白く脱色して目立つ。このためチンゲンサイのような葉菜類は、直ちに防除が必要となる。一方根菜類のだいこん等ではあまり問題にならない。しかし増殖を放置しておけば、やがて生育が阻害される。いずれにしても農業には弱く、他の害虫の防除をしていれば、ほとんど問題にならない。近縁に、模様が若干違うヒメナガメがいる。被害や対策はナガメと全く同じである。

クサギカメムシ カメムシ目 カメムシ科

Halyomorpha halys (Stål) Brown marmorated stink bug

【加害作物】 マメ科、果菜類、果樹等

通常果樹害虫として知られているが、移動性が高く、後述のアオクサカメムシと同様、時として豆類や果菜類の収穫部位に被害を及ぼすことがある。また茎に集団で加害すると、そこから上の部位が枯死してしまうこともある。農業には弱いので、通常の防除体系で他害虫の防除を行っていれば同時防除される。

アオクサカメムシ カメムシ目 カメムシ科

Nezara antennata Scott Eastern green stink bug

【加害作物】 マメ科、イネ科、果菜類、果樹等

全国でみられる。稲の重要害虫だが、野菜・豆類にも寄生し吸汁する。被害が発生するのは、主に果実と豆である。だいたいは斑点粒や不稔、トマトでは着色異常や奇形、とうもろこしでは吸汁痕等の被害が発生する。農業には弱いので、通常の防除体系で他害虫の防除を行っていれば同時防除される。

ミナミアオカメムシ カメムシ目 カメムシ科*Nezara viridula* (Linnaeus) Southern green stink bug**【加害作物】** マメ科、イネ科、果菜類、果樹等

西南暖地を中心に分布する。アオクサカメムシと形態、加害様相、防除策はほとんど同じである。

ホオズキカメムシ カメムシ目 ヘリカメムシ科*Acanthocoris sordidus* (Thunberg) Winter cherry bug**【加害作物】** ナス科、かんしょをはじめとするヒルガオ科

集団で吸汁し、希に萎凋症状を発生させることがある。茎を好み、葉の上にいることはほとんどないので目立たない。しかし、農業に弱く殆ど実害はない。

コアオカスミカメ カメムシ目 カスミカメムシ科*Apolygus lucorum* (Meyer-Dür) Small green plant bug**【加害作物】** 果菜類、果樹等

5mmほどのカメムシである。なすなどで新芽が吸汁されると、後に穴だらけの葉として展開し、一見イモムシ等に食われたように見える。非常に敏捷で、探すと常に茎の反対側に回り込み、見つけるのが難しい。農業には弱く、そこにいるものを防除するのは簡単である。しかし移動性が高いので、圃場外から次々と飛び込んでくるため注意が必要である。



ナガメ 成虫



ナガメの幼虫と被害



クサギカメムシ 成虫



クサギカメムシ きゅうりの被害



アオクサカメムシ 幼虫



ミナミアオカメムシ 成虫



ホオズキカメムシ 成虫



ホオズキカメムシ 幼虫



コアオカスミカメ 成虫



コアオカスミカメ なすの被害

オンシツコナジラミ

カメムシ目 コナジラミ科

Trialeurodes vaporariorum (Westwood) Greenhouse whitefly



【加害作物】

ナス科、ウリ科をはじめとする広範な作物(施設)

1974年に海外から侵入した。成虫は弱々しく飛ぶ1mm程の白いハエである。だが、沢山舞い飛ぶと、非常に不快である。幼虫は葉裏にへばりついて動かないため、微少な点のように見える。このためなかなか気が付かない。形態は後述のタバココナジラミと非常に似ているが、本種成虫はとまっているとき羽を開き気味にするので、上の写真のように未広がりに見える。一方タバココナジラミは、羽を閉じ気味なので次ページのとおり細長く見える。成虫は大量に卵を産むものの、幼虫の生育期間は1ヶ月ほどと、比較的長い。このため、ある日突然のように大量の成虫が出現し、驚くことがある。多発すると排泄物によりすす病を発生させる。また、吸汁害により植物の生育を悪くする。防除であるが、幼虫は葉裏に生息し移動しないため、散布むらのないようにすることが重要である。

タバココナジラミ

カメムシ目 コナジラミ科

Bemisia tabaci (Gennadius) Sweetpotato whitefly



【加害作物】

ナス科、ウリ科をはじめとする広範な作物(施設)

日本にもともと生息していたが、だいずなどで、ごくたまに発生がある程度であった。しかし1989年、薬剤抵抗性を身につけ、加害作物範囲も広い、新系統が海外から侵入した。これは、シルバーリーフコナジラミと命名され別種扱いされてきた。現在ではバイオタイプBと呼ばれている(以下、B)。そして近年、さらに強い抵抗性を身につけ、作物の嗜好もBと若干異なる、新系統バイオタイプQ(以下、Q)が侵入した。研究の結果、現在BとQは在来種と同じ種として扱われている。これらは外観からは全く区別が付かない。被害にはオンシツコナジラミと同様、吸汁害やすす病の誘発があるが、Bは葉の白化や果実の着色異常を、BとQはウイルス病の媒介も行う。特にトマト黄化葉巻病ウイルスの伝播は重大な問題となり、現在拡大が深刻化している。また、Qは有効な農薬が少ないので、発生したら徹底防除が必要である。それ以前に「入れない出さない」という、地域ぐるみの協力体制がないと、抑え込むことは不可能である。

モモアカアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Myzus persicae (Sulzer) Green peach aphid



成虫



有翅虫



なすの被害

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物

世界的に分布している。色や形には極めて多様性がある。様々な作物を加害し、生育阻害、ウイルス媒介等被害は甚大である。普段集団で加害しているのはすべて雌で、成虫になっても羽を持たずその場で次々に子孫を増やしていく。増えすぎて過密になったり植物が弱ってくると、成虫で羽を持つタイプ、すなわち有翅虫を産み出し、これが新たな餌を探す旅に出る。多くの農薬に対する抵抗性を身につけている。しかしながら、抵抗性は必ずしも固定的ではない。このため、少量調製した薬剤を一部で散布して、効果をまず確認するとよい。

ワタアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Aphis gossypii Glover Cotton aphid



成虫



すいがの被害

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹等広範な作物

前述のモモアカアブラムシと同様、世界的に分布している。同じ種とは思えないほど、色や形には多様性がある。作物により好む寄生部位は異なる。生長点に寄生されると、萎凋して生育が止まる。一方成葉に寄生された場合は、枯れるようなことはあまりない。旺盛に繁殖し、作物全体の生育を衰えさせ、収量を低下させる。また、甘露を出し生産物を汚す。このほか、ウリ科作物では、ウイルスの媒介も問題となる。多くの農業に対する抵抗性を身につけている。しかしながら、抵抗性は必ずしも固定的ではない。すなわち、過去に効かなかった薬剤が再び使える場合もある。よく効く薬剤だからといって連用せず、色々な作用性の薬剤を、組み合わせて用いることが大切である。

ジャガイモヒゲナガアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Aulacorthum solani (Kaltenbach) Glasshouse-potato aphid



【加害作物】

マメ科作物、ナス科やウリ科などの野菜、花卉、果樹等
広範な作物

大型のアブラムシである。数が少なくとも葉の脱色や落葉を引き起こす。またばれいしょ・だいず・やまのいもなどでは、ウイルス病の媒介虫としても重要害虫である。その意味で少数でも恐ろしい害虫である。農業に対する抵抗性事例の報告はあまりない。しかし、ワタアブラムシやモモアカアブラムシに効果があっても、本種に効果が低い薬剤があるので注意が必要である。

チューリップヒゲナガアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Macrosiphum euphorbiae (Thomas) Potato aphid



有翅虫



成虫と幼虫

【加害作物】

ナス科(特にトマト)、レタス、花卉

大型のアブラムシである。しかし、前述のジャガイモヒゲナガアブラムシほど顕著な脱色等の目立つ被害は少ない。一方、増殖力は強く、数が増えると巻葉や生育抑制などの被害が現れる。ウイルスの媒介も行う。農薬に対する抵抗性事例は報告されていない。

ダイコンアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Brevicoryne brassicae (Linnaeus) Cabbage aphid



【加害作物】

アブラナ科 キャベツ、ブロッコリーなどの硬くのっぺりした葉を好む
名を冠するだいこんは好まない

虫自体は蠟物質を身にまとい真っ白である。これが密集したコロニー（生活集落）をつくり、甘露によるすす病とあいまって、黒く汚らしい塊を形成する。また、生育阻害を起こす。これらの被害から、キャベツの結球部や、ブロッコリーの花蕾に寄生すると、全く商品価値がなくなる。春から夏にかけての発生が目立つ。農業に対して特に抵抗性事例の報告はなく、防除は容易である。

ニセダイコンアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

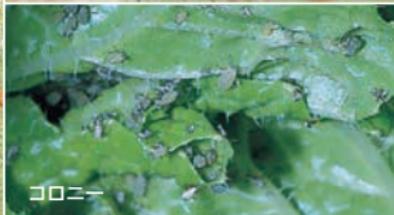
Lipaphis erysimi (Kaltenbach) Turnip aphid



成虫と幼虫



有翅虫



コロニー

【加害作物】

アブラナ科 キャベツなどにも寄生するが、だいこん、はくさいを好む

秋の発生が目立つ。本種も蠟物質をまとっているが、うっすらなので真っ白には見えない。特に幼虫は、蠟が少ないので黄色に見える。だいこん・はくさいは葉に起伏が多く、その間にコロニーを作る。このため、はじめは目立たないが、増殖すると生育阻害を起こす。またモザイク病ウイルスを媒介する。農薬に対して特に抵抗性事例は報告されておらず、防除は容易である。

ネギアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Neotoxoptera formosana (Takahashi) Onion aphid



【加害作物】

ねぎ、たまねぎ、にんにく、にら、らっきょう

ねぎ、たまねぎ等のねぎの仲間を主に加害する。増殖力と吸汁害がひどく、放置しておくと、株が完全に枯れあがってしまうこともある。無雪地帯では冬場も寄生し続け、被害を及ぼす。ウィルスの媒介も行う。はじめは特定の株で集中的に増える。やがて、羽を持つ成虫(有翅虫)を大量に産み出し、圃場全体に拡散する。農業に対して特に抵抗性事例の報告はなく、登録薬剤で簡単に防除できる。このため、初期発見が効率的な防除法である。

ニンジンアブラムシ

カメムシ目 アブラムシ科

Semiaphis heraclei (Takahashi) Celery aphid



【加害作物】

にんじん等のセリ科、ハスカップ

寄生により葉が萎凋する。ひどくなると完全に生育が止まってしまう。にんじんでは茎を好む。一方、パセリでは葉を好む。パセリはもともと葉がちりちりしているため、緑色の本種の寄生は目立たない。このため、手遅れになりやすい。普段より葉の生育が悪く感じたら、葉をほぐしてよく観察することが肝要である。農薬に対して特に抵抗性事例の報告はなく、防除は容易である。

ネギコガ

チョウ目 アトヒゲコガ科

Acrolepiopsis sapporensis (Matsumura) Allium leafminer



【加害作物】

ねぎ、たまねぎ等ネギ属

卵は葉の表面に産み付けられる。孵化した幼虫は、すぐに葉に潜り込み、内側から葉の表皮だけ残して食害する。その後蛹になる直前まで、外に出ることはほとんどない。葉内に潜りしある程度成長すると、被害が目立ってくる。しばらくすると、とても派手な老齢幼虫が葉の表面に脱出し、直ちに目の粗い繭を作り蛹になる。特に農薬に対する抵抗性事例の報告はない。しかし前述のように、葉の内側で密かに被害が進行するので、手遅れになる場合がある。予察用フェロモンなどを用いて、発生初期に的確な防除を行わなくてはならない。

コナガ

チョウ目 スガ科

Plutella xylostella (Linnaeus) Diamondback moth



【加害作物】

アブラナ科

世界を股にかけたアブラナ科作物の大害虫である。北日本では越冬できないが、春から夏にかけて風に乗って北上し、北海道でも重要害虫となる。蛾には珍しく、成虫は昼間も活発に飛び回る。終齢幼虫になっても7mmと小さいが、発生数が多いことと、葉の裏から食害すること、そして何より多くの農薬に対して抵抗性を持っていることから、防除が困難である。効果の高い薬剤を見極めつつ、かつ抵抗性を助長させないよう、異なる作用性の農薬を輪番で使っていくことが防除上のポイントである。

イモキバガ(イモコガ)

チョウ目 キバガ科

Helcystogramma triannulellum (Herrich-Schäggfer) Sweetpotato leaf folder



【加害作物】

かんしょ

葉をつづり合わせた巣の中に住み、通常幼虫を目にすることはない。巣を解体するとすぐ見つかるが、ガの幼虫とは思えない素早い動きではね回り、落下して逃げてしまう。老齢幼虫でも2cmに満たない。しかしながら、被害は食害だけではなく、葉をつづり合わせるにより光合成を阻害する。このため、発生量が高まると被害甚大となる。農薬には弱く、登録農薬を処理すれば、防除は容易である。

ジャガイモガ

チョウ目 キバガ科

Phthorimaea operculella (Zeller) Potato tuberworm



【加害作物】

ナス科

特に被害を及ぼすのは、ばれいしょとたばこ

1953年日本に侵入して以来、関東以西にてばれいしょ塊茎の重要害虫となった。いもが地表面に露出した部分や、収穫したものに幼虫が食入する。また、高温期に食害されるとそこから腐敗してくる。梅雨明けから発生量が増加する。幼虫は葉も食害する。葉肉にもぐり込み、表皮を残す。このため加害部は白く透け、その周りは褐色になる。ばれいしょでは葉の食害に実害はない。しかし、収穫物への被害を食い止めるため、葉に食害痕をみつけたら、早めに薬剤散布し密度低下させる。また貯蔵庫内をまめに点検して、被害いもを除去する。

ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ)

チョウ目 メイガ科

Diaphania indica (Saunders) Cucumber moth



【加害作物】

オクラ、わた等アオイ科とウリ科作物を好む
他の植物でも生活できる

西南暖地を中心とした南方系の害虫で、これまで特筆すべき害虫としてあげられてこなかった。しかし、1998年頃から各地で発生量が増加し問題となっている。すばしっこく、側面に白いラインの入った緑のイモムシである。若齢幼虫は生長点付近・花・葉脈の脇など隠れやすいところを好み、成長すると葉を綴ってその中に潜むようになる。そのため、薬剤を浴びせにくく、また、近年は従来の農業に対して抵抗性を身につけているため、防除が難しくなっている。

ダイコンシンクイムシ (ハイマダラノメイガ)

チョウ目 ツトガ科

Hellula undalis (Fabricius) Cabbage webworm



成虫



幼虫



だいこんの被害

【加害作物】

アブラナ科

寒い地方では冬を越すことができないため、西南暖地に生息している。しかしながら、温暖化により年々発生地域が北上している。気象条件により年ごとの発生にむらが大きく、発生予測が難しい。葉が重なったような場所、特に生長点付近を好むため、作物に与える被害は大きい。とりわけ育苗中の被害は致命的である。薬剤が十分かかるよう丁寧に散布することが大切である。さらに、作物の生育が盛んな時期には、農薬がかかっていない新展開葉が次々に出てくる。このため、散布間隔を短くすることなどが、防除上のポイントとなる。

アワノメイガ

チョウ目 メイガ科

Ostrinia furnacalis (Guenée) Oriental corn borer



幼虫



幼虫



とうもろこしの被害

【加害作物】

とうもろこし、しょうが

世界中でとうもろこしの害虫として名を馳せている。茎や穂に幼虫が潜入し、食い荒らす。茎に入るとそこから折れる。また雌穂に入れば、収穫物が直接加害される。卵塊で産み付けられ、若齢幼虫は穂の中などで集団生活するが、やがて分散する。老齢幼虫でも20mm前後にしかならないが、作物の重要部位をピンポイントで加害するので、被害は深刻である。作物の栽培時期と、本種の発生時期の兼ね合いで、散布適期は変わってくる。とうもろこしにて夏場の多発生期、1回散布では不十分である。雄穂の出穂から7～10日間隔くらいで、2回以上の散布が必要である。農業に対する抵抗性事例は報告されていない。

アオムシ(モンシロチョウ)

チョウ目 シロチョウ科

Pieris rapae crucivora Boisduval Common white



【加害作物】

アブラナ科

日本全国に分布し、成虫は最も親しみ深い蝶の代表である。幼虫は農業には弱いですが、成長が早く、摂食量が多いため、1頭でも残ると被害が大きい。成長すると大胆に葉の表にすることが多いが、虫の色と作物の葉の色が似ているため、意外と見落としがちである。作物が小さい苗のうち、防除を怠ると、深刻な被害を及ぼすことがある。近年北日本には、海外からオオモンシロチョウが侵入した。寄生植物は同じで、成虫はかなり似ている。一方幼虫は、毛虫状で、しかも集団で生育することから、本種とは外観が全く異なる。

エビガラスズメ

チョウ目 スズメガ科

Agrius convolvuli (Linnaeus) Sweetpotato hornworm



老齢幼虫



若齢幼虫



卵

【加害作物】

かんしょ、ふじまめ、あずき、たばこ等

お尻に角のような突起を持った老齢幼虫は、10cm近くにまで成長する。1頭あたりの食害量はすさまじい。しかし、卵は一つずつばらばらと離れて産みつけられる。したがって、本種のために畑が丸坊主、ということとはほとんどない。幼虫の色は、緑色から褐色まで様々であり、周囲に同化して意外と見つけにくい。農業には弱く、通常の防除体系で他害虫の防除をしていれば問題とならない。

セスジスズメ

チョウ目 スズメガ科

Theretra oldenlandiae (Fabricius) Impatiens hawkmoth



幼虫



卵

【加害作物】

かんしょも加害するが、さといもを好む

エビガラスズメと同様10cm近くまで成長し、お尻に突起を持つ。色は黒・緑・灰色、模様も齢期に応じて様々である。一方で、目玉模様は変わらぬトレードマークである。産卵は1個ずつだが、幼虫はエビガラスズメよりまとまって、数頭近くで見つかることが多い。農薬には弱く、ハスモンヨトウなどの防除をしていれば問題とならない。

ナカジロシタバ

チョウ目 ヤガ科

Aedia leucomelas (Linnaeus) Sweetpotato leaf worm



【加害作物】

かんしょ

幼虫は1頭取り出してみると派手だが、かんしょの葉柄や葉脈に掴まれていると、見つけるのは難しい。大型のため摂食量が大きく、秋に大発生した場合、畑が丸坊主になることがある。ただし農薬にはあまり強くないので、防除を怠らなければ問題になることは少ない。

ネキリムシ類

カブラヤガ チョウ目 ヤガ科

Agrotis segetum (Denis et Schiffermüller) Cutworm

タマナヤガ チョウ目 ヤガ科

Agrotis ipsilon (Hufnagel) Black cutworm



カブラヤガ 成虫



カブラヤガ キャベツの被害



カブラヤガ 幼虫

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、たばこ等広範な作物

この2種は成虫・幼虫とも非常に似ている。生態も変わらず通常区別することは困難である。畑に新しい作物を植えた直後に、成長した中・老齢幼虫が次々と苗を倒すことがある。これは前作から生息していた幼虫や、隣接圃場・雑草地から侵入した幼虫が加害することによるものである。昼間はほとんど地中に潜み、夜間に地上に現れて食害する。発生が少ない場合は、被害株周辺を掘って捕殺するのが効果的だが、常発地では作付け前の土壌処理剤が必須となる。

ウリキンウワバ

チョウ目 ヤガ科

Anadevidia peponis (Fabricius)



若齢幼虫



卵



中齢幼虫



きゅうりの初期被害

【加害作物】

はくさい、だいこん等を加害することもあるが、主にウリ科

突起がありそこから剛毛が生え、1頭をよくみるとおどろおどろしい幼虫であるが、きゅうりなどは茎葉に同様の突起があるので意外と見つけにくい。若齢幼虫は葉の裏側から表皮を残して食害するが、やがて蚕食するようになる。農薬には弱く、通常の防除体系で他害虫の防除をしていれば問題にはならない。

タマナギンウワバ

チョウ目 ヤガ科

Autographa nigrisigna (Walker) Beet semi-looper



【加害作物】

アブラナ科が主体であるがレタス、にんじん等も加害する

暖地の平野部で多く見られることはあまりないが、高冷地などでは時として多発生する。若齢のうちはヨトウムシに似ているが、集団行動することはない。また、少し大きくなるとシャクトリムシのように歩くので、はっきり区別しやすくなる。主に下葉を好むため、少発生のうちは問題になることはあまりない。しかし、葉表にほとんど出てこないこと、1頭あたりの摂食量も多いことから、発生量が高まると、被害は甚大となる。農業に対する抵抗性事例は報告されておらず、通常コナガ等の防除をしていれば問題にならない。近年、近縁のイラクサギンウワバの発生が、西日本を中心として認められている。幼虫は非常に似ており、圃場にて肉眼で区別するのは難しい。ただし、防除上の注意点は特に変わらない。

タバコガ類

タバコガ チョウ目 ヤガ科

Helicoverpa assulta (Guenée) Oriental tobacco budworm

【加害作物】 トマト、ピーマン、ほおずき、たばこ等ナス科

オオタバコガ チョウ目 ヤガ科

Helicoverpa armigera (Hübner) Corn earworm

【加害作物】 ナス科、アブラナ科、花卉をはじめとする広範な作物



タバコガ 越冬蛹



オオタバコガ 成虫



タバコガ ふ化幼虫と被害



オオタバコガ 幼虫とピーマンの被害

タバコガは昔から、主にトマト・ピーマンの害虫として知られている。たばこでは「アオムシ」といえば本種を指す。オオタバコガは1995年頃から次第に発生量が増加し、野菜から花まで加害作物が多いことから大きな問題となっている。いずれも太めの毛がまばらに生えたイモムシであり、非常によく似た種であるため、幼虫での区別は難しい。ともに幼虫の色は、環境によって緑・赤褐色・黄褐色等になる。実や茎に潜り込む習性があるため、葉液を浴びせること及び摂取させることが難しく、防除が困難な害虫である。

ヨトウムシ(ヨトウガ)

チョウ目 ヤガ科

Mamestra brassicae (Linnaeus) Cabbage armyworm



【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物
特に問題となるのはアブラナ科、マメ科、レタス等

日本全国に生息する。卵は数十個以上まとめて産み付けられ(卵塊)、若・中齢幼虫のうちは葉の裏で集団生活をする。老齢幼虫は、昼間は地中や結球内に潜伏し、夜間表に出てきて食害する。ここに至っては、被害があるのに虫が見つからないという、やっかいな事態に陥る。老齢幼虫は4cmにもなり、1頭当たりの食害量も多大である。作物の芯部に潜り込む前の、若齢幼虫のうちに薬剤を処理することが防除上のポイントとなる。

アワヨトウ

チョウ目 ヤガ科

Mythimna separata (Walker) Rice armyworm



【加害作物】

とうもろこしをはじめとするイネ科

通常あまり多く見かけないが、時として大発生し、見渡す限りのイネ科植物を食い尽くすようなことがある。卵塊で産卵される。若齢幼虫は集団で加害するが、この時期の被害は軽微である。しかし成長すると5cm近くに達し、昼間は隠れ、夜暴食するようになる。農薬に対する抵抗性事例の報告はない。しかし、大型の老齢幼虫には効きにくくなるので、若齢幼虫の時期を逃さず防除する。

シロイチモジヨトウ

チョウ目 ヤガ科

Spodoptera exigua (Hübner) Beet armyworm



雄成虫



中齢幼虫



卵塊

【加害作物】

マメ科作物、野菜、花卉の多くを加害する
特にねぎ、えんどう、かすみそうなどを好む

1980年代以降発生量が増えた害虫である。老齢幼虫でも3.5cm程度と、ハスモンヨトウなどに比べて小柄である。体色は緑が多いが、黒褐色まで変異が大きい。全国に分布するが、地域によって発生量がかなり異なる。各種農薬に対する抵抗性が発達していること、すぐに葉の内部や折り重なった部分に潜り込むことから、防除が難しい。若齢幼虫のうちに防除することがポイントである。

ハスモンヨトウ

チョウ目 ヤガ科

Spodoptera litura (Fabricius) Common cutworm



成虫



ふ化幼虫



老齢幼虫

【加害作物】

イネ科を除くほとんどの作物

おもに西南暖地に生息し、寒い地方では冬を越すことができないとされる。ヨトウムシと同様に卵は固めて産み付けられ(卵塊)その上に鱗粉をかける。幼虫は若齢のうち集団生活をする。ひとつの卵塊から孵化する幼虫数がヨトウムシより遙かに多いので、被害もさらに大きい。また、多食性のため、非常に多くの種類の作物を加害する。本種は、中齢になると頭部後方に一對の大きな黒紋が目立つようになり、ヨトウムシ等と区別しやすくなる。生息地域によっては、各種農薬に対する抵抗性を持っている。老齢幼虫に対しては、効果の高い農薬が非常に少ない。若齢幼虫のうちの防除が大切である。

コガネムシ類

ドウガネブイブイ コウチュウ目 コガネムシ科

Anomala cuprea Hope Cupreous chafer

ヒメコガネ コウチュウ目 コガネムシ科

Anomala rufocuprea Motschulsky Soybean beetle



ドウガネブイブイ 成虫



ドウガネブイブイ さつまいもの被害



幼虫



ヒメコガネ 成虫

【加害作物】

マメ科、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範囲な作物

コガネムシ類は多くの種類があり、害虫となる種も多い。中でもこの2種は一般的であり、大型の種類である。成虫は豆類やいちごなどの葉を食べるが、通常の防除体系では他害虫と同時防除されることが多い。厄介なのは幼虫で、地中で生活し、たいていの作物の根を食い荒らす。特に根菜類や芋類では商品価値が無くなり、被害甚大となる。また、葉菜類や果菜類においても、幼虫の発生が多い場合には、生育不良や欠株が生じるので注意する。土壌処理剤による防除がポイントである。

ニジュウヤホシテントウ・オオニジュウヤホシテントウ

ニジュウヤホシテントウ コウチュウ目 テントウムシ科

Henosepilachna vigintioctopunctata (Fabricius) Twenty-eight-spotted ladybird

オオニジュウヤホシテントウ コウチュウ目 テントウムシ科

Henosepilachna vigintioctomaculata (Motschulsky) Large twenty-eight-spotted ladybird



ニジュウヤホシテントウ 成虫



ニジュウヤホシテントウ 卵塊



ニジュウヤホシテントウ 幼虫



オオニジュウヤホシテントウ 成虫

【加害作物】

ナス科が主体、まれにウリ科

両種とも成虫は7mm前後で翅に28の斑紋を持つ。ニジュウヤホシテントウの方が、小振りではあるが、よく似ている。関東を境に、主に西南にニジュウヤホシテントウ、東北にオオニジュウヤホシテントウが分布する。成虫・幼虫ともに葉を加害し、特徴的な網目状の食痕を残す。卵塊を生むため若齢幼虫は集団で加害する。ばれいしょ・なすなどでは、農薬を控えると被害が目立ってくる。農薬に弱く、しかも薬液がかかりやすいところにいるため、防除は容易である。

ウリハムシ

コウチュウ目 ハムシ科

Aulacophora indica (Gmelin) Cucurbit leaf beetle



成虫



幼虫によるメロンの被害



成虫によるきゅうりの被害

【加害作物】

ウリ科

北海道を除き、西南暖地を中心とした全国に分布する。成虫は果実や葉を食害する。葉の食害痕は特徴的な丸い穴で本種とすぐわかる。幼虫は土中に棲み、まず細根を食べ尽くし、次第に主根もスポンジ状に食害する。作物地上部は萎ちようするようになり、枯死に至る。被害は幼虫の方が大きい。被害は露地栽培で見られ、施設ではあまり問題になっていない。

キスジノミハムシ(キスジトビハムシ)

コウチュウ目 ハムシ科

Phyllotreta striolata (Fabricius) Striped flea beetle



成虫



成虫によるだいごんの被害



幼虫によるだいごんの被害

【加害作物】

アブラナ科

成虫は名前の通り黒地に黄色いストライプの入った、3mmほどのよく跳ねる甲虫である。アブラナ科、特にだいごんを好み、成虫は葉に丸い1mmほどの穴をあけて食害する。幼虫は地下に棲み、根の表面を食い荒らすため、発生が多いと全く商品価値が無くなる。生育初期から発生が多い場合は、成虫および幼虫の加害によりほとんど株が無くなることもある。常発地では、播種時の土壌処理剤と生育後期の散布剤による防除が欠かせない。

ヤサイゾウムシ

コウチュウ目 ゾウムシ科

Listroderes costirostris Schoenherr Vegetable weevil



成虫



幼虫とにんじんの被害

【加害作物】

野菜、たばこ等広範な作物
問題となるのはアブラナ科、セリ科

1942年に初めて確認された侵入害虫である。成虫は夏眠して秋に産卵する。このため加害時期は秋から春と、他の害虫とは異なる。幼虫には脚がない。幼虫は新しい組織を好み、また葉表に出ることを嫌うので、芯部に食入することが多い。こうなると生育が阻害され、ひどいときには欠株となる。ただし農業には弱いので、通常の防除体系で他害虫の防除をしていれば、問題になることはほとんどない。

トビイロヒョウタンゾウムシ(ハイロサビヒョウタンゾウムシ)

コウチュウ目 ゾウムシ科

Scepticus uniformis Kôno



成虫

【加害作物】

マメ科作物、野菜等

特ににんじん、ごぼう、らっかせいで被害が多い

成虫が地上部、幼虫が地下部を食害する。被害は幼虫の方が大きい。成虫は飛翔できず、歩行も活発ではないので、現在問題となっている地域は限られている。しかし、生態が詳細に解明されていないことから、完全な防除対策が確立していない状況である。現在登録のある農薬は非常に少ない。

カブラハバチ類

ハチ目 ハバチ科

Athalia spp. Cabbage sawfly



【加害作物】

アブラナ科

非常に似て食べ物も同じ種カブラハバチ・ニホンカブラハバチ・セグロカブラハバチの3種が国内に生息する。成虫はいずれもオレンジ色の腹部と黒色の頭部をもち、胸部の模様が異なる。卵は上の写真のように葉裏の組織の中に産み込まれる。幼虫の形態と食害の様子は、チョウ目の幼虫と全く同じである。若齢幼虫は青みを帯びた灰色であるが、成長するにつれて黒色のイモムシとなる。イモムシに見えるが、もちろんBT剤の効果はない。また、化学合成農薬も、チョウ目害虫とは効果が異なる場合があるので、注意する。ただし抵抗性事例の報告はないので、登録のある農薬で簡単に防除できる。

クロバネキノコバエ類

チビクロバネキノコバエ ハエ目 クロバネキノコバエ科

Bradysia agrestis Sasakawa

【加害作物】 ゆり、ねぎ、しょうが、いちご、きゅうり、メロン、さといも

ジャガイモクロバネキノコバエ ハエ目 クロバネキノコバエ科

Pnyxia scabiei (Hopkins) Potato scab gnat

【加害作物】 ばれいしょ



チビクロバネキノコバエ 成虫



チビクロバネキノコバエ 幼虫

幼虫は数mmの半透明で細長いウジである。本来幼虫は、土壤中のカビ菌糸や腐植を食べているが、時として作物自体を加害することがある。地際部や葉が地面に接触した部分を食害する。また、茎の内部に食入することもある。種の判別は顕微鏡下でしかできず、圃場では困難である。現在登録薬剤は非常に少なく、作物によっては全くないので、対応に苦慮している。

ネギネクロバネキノコバエ

ハエ目 クロバネキノコバエ科

Bradysia sp. Welsh onion root darkwinged fungus gnat



幼虫と被害



成虫

【加害作物】

ねぎ、にんじん、にら

幼虫は黒い頭部と半透明の棒状の腹部をもち、体長は老齢幼虫で4 mm程度となる。ねぎおよびにんじんの地下部位を食害し、地上部に影響がでにくく収穫時に初めて発生に気付くことが多い。にんじんでは加害部位が黒褐色に変色し、針でついたような大きさから十数cmのものまでであるが、被害の大きさの割に幼虫の寄生は少ない。近縁の別種は腐食性であるのに対し、本種は新鮮な植物を加害するため実害が大きくなる。種の判別は難しいが、雄成虫は触角第4節の長さなどで簡易的に可能である。成虫は食害をせず寿命も数日程度で、活発に飛翔することなく地表面を徘徊することが多い。ねぎでは始め茎盤に多く生息し、土寄せ後は葉鞘に多く分布する。土寄せ後は薬剤が届きにくくなるため、防除が困難となる。

マメハモグリバエ

ハエ目 ハモグリバエ科

Liriomyza trifolii (Burgess) Serpentine leafminer



成虫



食害

【加害作物】

ナス科、ウリ科をはじめとする広範な作物

葉に潜り込んで食害し、白い線状の跡を残す害虫は、「絵描き虫」と呼ばれている。「絵描き虫」には、蛾の仲間、甲虫の仲間もいるが、最も多いのはハモグリバエ類である。葉の中に潜っているのは幼虫で、小さなウジである。また成虫は産卵管で葉の表面を傷つけ産卵する。この行動は産卵だけではなく、その傷からしみ出る汁の摂食もしている。そのため沢山の白い斑点を残す。マメハモグリバエは多くの農業に抵抗性を持っており、対応を誤ると、葉がすべて落ちてしまうほどの被害をもたらす。本種は1990年に初めて確認され、全国に広がり、名前と異なり多様な作物で重要害虫となった。しかし、後述のトマトハモグリバエの侵入後、これに取って代わられつつあり、最近ではなかなかお目にかからない。

トマトハモグリバエ

ハエ目 ハモグリバエ科

Liriomyza sativae Blanchard Tomato leafminer



【加害作物】

ナス科、ウリ科をはじめとする広範な作物

1999年に初めて確認された侵入害虫である。同じ侵入害虫のママハモグリバエと同様、本種も加害作物が広範である。しかしこれら2種の好物はやや異なる。例えば、本種はウリ科が大好物である。一方ママハモグリバエは、ウリ科では、生育初期以外に問題になることはない。また、本種は菊には殆ど寄生しない。一方、ママハモグリバエは好物である。これら2種と後述のナスハモグリバエは、成虫・蛹に形態的な違いがあるものの、非常に小さい虫であるので、圃場にて肉眼で区別することは困難である。多くの農薬に対する抵抗性を持っており、効果のある薬剤は限られる。

ナスハモグリバエ

ハエ目 ハモグリバエ科

Liriomyza bryoniae (Kaltbach) Eggplant leafminer



成虫



幼虫



潜孔痕と蛹

【加害作物】

ナス科、ウリ科、アブラナ科

ナスハモグリバエは古くから日本にいた種であるが、形態は前述の侵入害虫マメハモグリバエ・トマトハモグリバエと酷似している。肉眼での区別は困難である。ただし、寄生する植物の範囲は他の2種より狭い。また効果のある農業の種類も多く、増殖力も低い。このため、通常の防除体系で他害虫の防除をしていれば、本種の被害が発生することはない。

ネギハモグリバエ

ハエ目 ハモグリバエ科

Liriomyza chinensis (Kato) Stone leek leafminer



成虫



ねぎの被害

【加害作物】

ねぎ、たまねぎ、にら、らっきょう

全国に分布し、古来からネギ属の害虫であった。成虫は葉の組織内に産卵する。産卵痕はきちんと並んだ点状である。幼虫は前進しながら、葉の内側より葉肉を食害する。このため表面には白い筋が残る。ネギアザミウマが本種と大体同じ時期に発生するが、こちらの食害痕は表面がかすり状になるので、区別は容易である。本種は多発すると葉が真っ白になることもあるので、とくに幼苗期の防除を徹底する。また、効果のある薬剤が、他種ハモグリバエと異なる場合があるので注意する。

ナモグリバエ

ハエ目 ハモグリバエ科

Chromatomyia horticola (Goureau) Garden pea leafminer



【加害作物】

マメ科、キク科、アブラナ科が主体

ナモグリバエは日本在来であり、これまでは専らえんどうやアブラナ科野菜に発生するのみ、農業にも弱く、深刻な被害を与えることはなかった。しかし近年、レタス・しゅんぎく・きくなど、これまであまり発生が多くなかった作物に、多発する事例が増加している。登録農薬がないことや、少しでも被害が出ると商品価値が下がってしまうことなどから、問題害虫化している。幼虫は他のハモグリバエ同様「絵描き虫」である。一方成虫は、他のハモグリバエが黄色と黒のツートンなのと異なり、普通のハエのように地味である。

タネバエ

ハエ目 ハナバエ科

Delia platura (Meigen) Seedcorn maggot



【加害作物】

マメ科作物、野菜、たばこ等広範な作物の生育初期

成虫は小型の地味なハエである。魚かすや未熟堆肥など、臭気の強い有機質に集まってきて産卵する性質がある。幼虫であるウジは、発芽したの芽や移植直後の苗の地際部などを好み、欠株の原因となる。生育中期においてもだいこんなどでは根部が食害されることがあり、商品価値が無くなってしまう。堆肥を完熟させ臭気を抑えることが重要だが、常発地では粒剤処理等の対策が必須である。

2018年9月 第3刷発行



非売品・無断転載を禁ず